

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

2015 年度(前期) 一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書

テーマ

ビハーラケア研究会

～仏教から見る平穏な看取りと介護を考える～

2015 年度テーマ：「笑って死ぬ」

申請者：河原 俊亨

所属機関：ビハーラケア研究会

提出年月日：2016 年 8 月 31 日

2015年度は奇数月の第4月曜日に定例研究会を開催し、福祉・医療・宗教・教育等の各方面の第一線で活躍されている方々からご講演いただいた。講演後は講師の方と参加者との意見交換の場を設け、当研究会の2015年度のテーマである「笑って死ぬ」ということについて理解を深めることができた。以下、各定例研究会の概要を記す。

第1回 定例研究会

日時：2015年5月25日(月) 15:00～17:00

会場：あそか苑みずほ1階地域交流スペース

講師：桑原 昭信

(龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員、ビハーラケア研究会 主任講師)

講題：「ビハーラ研究者の視点から」

参加人数：27人

【概要】



龍谷大学アジア仏教文化研究センターの博士研究員であり、宗教、仏教を研究する桑原昭信氏を講師としてお招きした。また、氏は宗教、仏教と社会福祉との関係についても造詣が深く、当研究会の主任講師を務めている。

元来「ビハーラ(vihāra)」とは仏教の言葉であり、一般に言う寺院も意味する。また、心身の安らぎ、くつろぎという意味もあり、総じて休息できる場所と理解することが

できる。これらの安らぎや休息の場所を求める理由としては、誰もが経験しうる「全人的苦痛」への対処を挙げることができ、その苦痛とは「身体的苦痛」「社会的苦痛」「精神的苦痛」「スピリチュアル的苦痛」の4つに大別されるものである。

そもそも「宗教」という言葉の意味について、漢字の解字、他言語への翻訳とその語源等に基づきながら説明するなか、ラテン語の「宗教」の語源の一説である「再び結びつける」という意味が注目される。原始以来、人間存在の根本を問うことに起因した苦悩への解決こそ、宗教を誕生せしめた大きな原動力であった。このことより、今日の「スピリチュアル的苦痛」への関心の高まりは、昨今の宗教離れが必然的に生んだ結果と理解することができる。人間存在の根本問題へと人々の関心を再び結びつけ、この問題に答え得る一つの真理へと教え導いていくものが宗教であり、改めてその存在意義を知らされる。

仏教に基づくビハーラを理念とし、時、場所に限られず、誰もが心身の安らぎや休息の場所を求め得ることの意味を考える機会となった。



第2回 定例研究会

日時：2015年7月27日(月) 15:00～17:00

会場：あそか苑みずほ1階地域交流スペース

講師：名波 素子（社会福祉法人明照会 菩提樹の家）

講題：グループホーム管理者の視点から

参加人数：32人

【概要】

あそか苑のグループホーム菩提樹の家の管理者である名波素子氏を講師としてお招きした。グループホームの特徴や、菩提樹の家における初めての看取りケアについてお話しいただいた。

菩提樹の家は木造平屋建ての施設で、1ユニット9名のグループホームである。入居者と職員が家族のように接し、家庭の雰囲気的大事にしながら、ゆったりとした時間が流れる場所である。この度の看取りケアにおいては、スタッフ、訪問看護、そして、利用者の家族の方々と一団となった協力体制をしくことができたため、強い痛みを訴える入居者に対して非常に効果的な緩和処置が可能となった。スタッフは入居者と家族の方々の思いを常に尊重し、互いの気持ちを理解し合った上でケアにあたることができたのは、菩提樹の家という小さな空間ならでのことでした。

しかし、特養の施設であれば安楽に入浴を行うことが可能であり、看護師も日中常駐して居ること等、グループホームで過ごすことについては直前まで皆で意見を交わし合い、看取りの準備にはたくさんの時間を必要とした。この葛藤はビハーラの理念・実践に対する理解をさらに深め、大きな成長の糧と成ったことは言うまでもありません。実体験に基づいた貴重なお話をお聞かせいただきました。



第3回 定例研究会

日時：2015年9月28日(月) 15:00~17:00

会場：あそか苑みずほ1階地域交流スペース

講師：大來 尚順 (公益財団法人 仏教伝道協会)

講題：国際仏教伝道者の視点から

参加人数：29人

【概要】



浄土真宗本願寺派の僧侶として各地での講演や日・英の執筆活動を通し、国内外への仏教伝道活動を展開している大來尚順氏をお招きした。これまでの留学経験や研究活動に加え、現在の活動に基づきながら、ビハーラについて広い視野からお話いただいた。

米国やタイへ留学した時の主な研究テーマは **Engaged Buddhism**(社会参画仏教)であり、各地において様々な宗教が母体となって運営するホスピスを訪れた際の様子を、写真で紹介しながら、それぞれのターミナルケアの在り方について説明した。加えてアメリカの仏教事情にも話は及び、特に看取りに関しては医療と仏教の協力体制に注目が集まっていること等、各方面における興味深い取り組みも取り上げられた。

また、現在、大來氏は自坊において地域住民と近隣の医師、医大生、宗教者との交流の場として、「お寺ではなそ」というプロジェクトを手がけている。これは学びたい人と教えた人がお寺に集まり、様々な視点から「いのち」について共に学びを深める機会とするものである。また、地域のなかの「お寺」という場所が、心豊かな毎日を送る上で大切な空間として共有する場所という再認識を促すものでもあり、今後の活動が期待されている。



日本のみならず全世界へ向けて仏教を広めようとする大來氏の大きな志しには圧倒されるばかりであるが、仏教を中心とした取り組みという点では共通し、とても勇気づけられた。



また、氏の著書『英語でブッダ』より、英語を通して仏教を学ぶ視点からも大きな示唆をいただいた。

第4回 定例研究会

日時：2015年11月23日(月) 15:00~17:00

会場：あそか苑みずほ1階地域交流スペース

講師：馬場 拓也（社会福祉法人愛川舜寿会 ミノワホーム）

講題：特別養護老人ホームの視点から

参加人数：35人

【概要】

社会福祉法人愛川舜寿会の経営企画室室長である馬場拓也氏を講師としてお招きした。高齢者のケアをサービス業と考え、「ホスピタリティ」をキーワードとして、日々のケアとその両立を目指す取り組みについてお話しいただいた。

馬場氏は現職に就く前はアパレル業界に身を置き、「サービス」「おもてなし」というホスピタリティを追求し尽くし、GIORGIO ARMANI JAPANのトップセールスマンとして活躍していた。アパレル関連のサービス業界から介護業界へと転進を遂げた後、前職で培ったホスピタリティに基づき、「介護」は「サービス業」かどうかと自問する日々を送っていた。そこで氏はニーズが多様化する介護業界において、施設などの組織の中で働く全職員が、利用者と直接関わっていても、常にホスピタリティを意識して働くことが重要と考えられるようになった。

「サービス」とは万人に均一の対応を図るマニュアル化可能なことを意味するが、一方で

「ホスピタリティ」とは相手の個々の状況に合わせた対応であり、決してマニュアル化できないものである。このことより、介護は単なる「ケア」ではなく、それ以上の精神をもって行うものでなくてはならないとの結論に至ったのである。氏はそれを実現していく方法を、利用者ごとに提案することを実践している。

介護にホスピタリティを浸透させ、「満足」を「感動」にまで昇華させていくことを目指す馬場氏の発想は、これからの介護業界に新しい変化をもたらすものであり、日々の認識を改める機会となった。



第5回 定例研究会

日時：2016年1月25日(月) 15:00～17:00

会場：あそか苑みずほ1階地域交流スペース

講師：黒岩 美奈子（伊丹市社会福祉事業団 伊丹市訪問看護ステーション）

講題：訪問看護師の視点から

参加人数：30人

【概要】

社会福祉法人伊丹市社会福祉事業団の伊丹市訪問看護ステーション管理者である黒岩美奈子氏を講師としてお招きした。黒岩氏は11年の臨床を経て、4年間病院で看護師として働き、現在は訪問看護師として活躍されている。生きるため、治すための治療や処置が当たり前であった医療現場から、訪問看護師として働くなか、自然な形で看取りをしたことからの色々な気づきについてお話しいただいた。



高齢者の終末期とはどのような症状が終末期なのかということを考えた時、現状では「食べられるかどうか」ということが判断の基準となる。食べられなくなってきた時は、あらゆる手立てを使って栄養補給を考え、そのときに医療的処置をもって命を永らえるかどうか
が境目となる。食事については口から食べたい、排泄についてはトイレに行きたい、ぐっすり眠りたい、自分で動きたい、楽に過ごしたいという様々な本人の思いが、生命と生活を支える視点においては基本となり、この視点に立てば、在宅医療とは病院とは異なり、最期までその人の意志が尊重された生活を続けることができるように支えることができ、その意味を定めることができる。



しかし、家族による介護には限界があり、最期は痛みや苦痛から家族が緩和医療を選択せざるおえない現実もある。また、現在は認知症の高齢者が増え、全てにおける自己決定・解決が困難な時代である。本人・家族も含め、それぞれの死生観を尊重しながら援助していくことが大切であり、様々な提案ができるように援助していくことが必要とされている。人間は自ら答えを出す力があり、それを引き出していくことこそ、これからの専門職に求められていることとまとめられた。



第6回 定例研究会

日時：2016年3月28日(月) 15:00～17:00

会場：あそか苑みずほ1階地域交流スペース

講師：菅 知尚（浄土真宗本願寺派 僧侶、広島刑務所 教誨師）

講題：教誨師の視点から

参加人数：26人

【概要】



浄土真宗本願寺派の僧侶であり、広島刑務所所属の教誨師である菅知尚氏を講師としてお招きした。これまで約10年の間、月に1度施設に赴き、1～2人の被収容者と接してきた経験を通し、ビハーラが意味するところの「安住・安養・休息の場所」についてお話しいただいた。

教誨師と被収容者が1対1で話し合う形の「個人教誨」は、最も有効かつ必要な方法と考えられ、広島刑務所においても大半がこの形で行われているそうである。他者の目を気にすることなく、純粹に「個」と向き合うことのできる場であり、日常ではなかなか持ち得ない機会である。「個」と「個」が互いに深く関わり、向き合うことにその意義がある。

各被収容者によって受け止め方は様々であるが、刑務所生活は自分と向き合う時間を持たなければ、規則に縛られた不自由な面ばかりに目が向いてしまうものである。犯した罪を消し去ることはできないけれども、真摯に向き合って反省するなか、これまでの人生を見つめ直すことが可能となってくる。

ある被収容者は「最近は自分に言い訳ができなくなった」と話すそうである。それまでは生みの親や周囲の人間に、諸々の原因の在処を見つけ出そうとしてきたが、どこまで行っても満足できるものはなく、行き着いたのは自分自身であったとうことである。仏教の「苦」や「我」の理解を通して自身を見つめるなか、いつ、どこで、どんな顔をしていようとも、変わらぬ仏の教えが存在することをもって、確かな拠り所を、安住・安養・休息の場所を得ることができるのである。

「個」と「個」が互いに深く関わること、仏教を通して自身を見つめるということ等を通し、改めてビハーラを理念の中心とするこの意味を考える機会となった。



【感想】

2015年度の定例研究会を計画通りに終えることができ、有縁の方々に向けて先ずはお礼申し上げます。

さて、この度の研究会を計画するにあたり、期待される効果として掲げた「福祉・医療・宗教・教育等の様々な視点からの講演を通し、「笑って死ぬ」の年度テーマを軸に、地域全体で仏教から見る平穏な看取りと介護について考え、意見を交換し、共に理解を深めること」については、一定の成果をあげることができたと感じております。地元を中心としてお招きした講師の方々のお話は、どれも第一線で活躍されている方だからこその内容であり、参加者の満足度は非常に高いものでした。また、参加者のなかには、介護、医療に従事される方だけではなく、異業種に従事される方も回を重ねるごとに増えていきました。これは大きな成果の1つとしてあげておきます。

今後も地域全体で仏教から見る平穏な看取りと介護について考え、意見を交換し、共に理解を深めることを進めていきたいと存じます。また、最後になりましたが、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団より助成いただき、誠にありがとうございました。